

日本海鳥取沖海底 MT 観測と連携した陸域での長周期 MT 観測の概要

Inland MT Measurements in cooperation with Seafloor MT off Tottori in the Sea of Japan

大志万 直人 [1]; 吉村 令慧 [1]; 塩崎 一郎 [2]; 中尾 節郎 [3]; 矢部 征 [4]; 望戸 裕司 [5]

Naoto Oshiman[1]; Ryokei Yoshimura[1]; Ichiro Shiozaki[2]; setsuro Nakao[3]; Sei Yabe[4]; yuuji mochido[5]

[1] 京大・防災研; [2] 鳥取大・工・土木; [3] 京大・防災・地震予知研究センター; [4] 防災研・鳥取観測所; [5] 鳥大・工・土木
[1] DPRI, Kyoto Univ.; [2] Dept. of Civil Eng., Tottori Univ; [3] RCEP, DPRI, Kyoto Univ.; [4] TOTTORI OBSERVATORY,RCEP,DPRI; [5] Civil engineering,Tottori Univ.

これまで山陰地域では陸上の広帯域 MT 観測による比抵抗構造探査が精力的に実施され（例えば、塩崎他（1999）、笠谷他（2002）など）、山陰地域に見られる帯状の地震分布に沿って、その地殻下部に低比抵抗領域が存在すること、この低比抵抗領域は大山火山等ではより浅部にまで存在することなどが明らかにされてきている。

低比抵抗領域に注目し、山陰地域の陸域と海域を含む西南日本背弧の地殻・マントル比抵抗構造モデルを構築し、この地域での地震活動及び火山分布と比抵抗構造との関係をさらに詳細に明らかにすべく、フラックスゲート型磁力計の MT 観測装置（U43CF）を使用して 2 箇所の観測点で 8 月上旬から、また、9 月下旬からは孔中 3 成分磁力計（BHF601K）を使用して地磁気 3 成分のみを 1 箇所で観測開始した。海域では、海底磁力電位差計（OBEM）を 4 台、海底地電位差計（OBE）1 台を、鳥取県の練習船「若鳥丸」を用いて昨年の 8 月下旬に設置し、回収作業は、東京大学海洋研究所の「淡青丸」を使用して 10 月 11 日～20 日の航海の期間に実施した。本講演では、陸域での観測の概要を紹介したい。